

# 第二言語習得における句動詞

三語句動詞の学習において日本人学習者が直面する問題点

Phrasal Verbs in Second Language Acquisition  
The Trouble Spots Japanese Learners of English Face  
When Learning Three-word Phrasal Verbs

中村 俊佑

東京都立瑞穂農芸高等学校教諭

Shunsuke Nakamura  
Teacher, Mizuho Nougei High School

本研究は、日本人英語学習者が三語句動詞を学習する際に、習得が困難な項目を分析することを目的とする。第二言語習得の分野において、英語における句動詞の習得は困難とされているが、本論文では句動詞研究のなかでも未開拓の領域である三語句動詞に焦点を当てて議論を展開する。主に、日本語からの連想度や学習者の経験度、海外経験の有無、英語力など、どのような学習者変数が習得に影響を与えているかを分析する。本研究で明らかになったことを踏まえ、日本人英語学習者に句動詞を教える際の教育的示唆を提示する。

This research aims at analyzing the possible problems which tend to take place when Japanese learners of English learn “three-word phrasal verbs”. Previous research has shown that phrasal verbs are generally difficult for second language learners to acquire. This study focuses on the area of “three-word phrasal verbs,” an area which has not been explored yet in the field of second language acquisition. The main question is: How do the variables such as semantic transparency, familiarity with the target phrasal verbs, overseas experiences, and the level of English proficiency influence the acquisition of “three-word phrasal verbs” by Japanese learners? On the basis of the findings, we make some pedagogical suggestions for teaching phrasal verbs in the context of Japanese classrooms.

Keywords: 三語句動詞、第二言語習得、基本語、意味の抽象化、学習者変数

\*投稿時の所属は、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程。

## 1 句動詞の定義と三語句動詞

句動詞 (phrasal verbs) とは、「動詞と不変化詞 (空間詞) が結びつき、1つの動詞として機能するもの」と定義され (Bolinger, 1971; Fraser, 1976; 田中他, 2006; 森本, 2009)、統語的な観点から以下の6つのタイプに分類できる。

- (1) 自動詞＋副詞
- (2) 自動詞＋前置詞
- (3) 自動詞＋副詞＋前置詞
- (4) 他動詞＋副詞
- (5) 他動詞＋前置詞
- (6) 他動詞＋副詞＋前置詞

このうち、本研究で扱うのは、(3)と(6)の形のものであり、これを「三語句動詞 (Three-word Phrasal Verbs)」と呼ぶ。三語とは、「動詞」、「副詞」、「前置詞」の構成素のことであり、前置詞以下の名詞によって句動詞を構成する語の意味が抽象化し、形式と意味が直ちに結びつきにくいものを「三語句動詞」と定義する。例えば、以下の例で、(b)を三語句動詞と呼ぶ。(a)の場合は、「来る」の意味の come から字義的な解釈が可能であるが、(b)の場合、前置詞句を取ることによって、字義的解釈から離れた抽象化された意味に変化する。

(a) He came up. (彼は現れた)

(b) He came up with an idea.

(彼はアイディアを思いついた)

## 2 これまでの句動詞の習得研究

句動詞は、英語における最も生産的な項目であり (Bolinger, 1971)、英語的発想で物事を表現する時の鍵になる表現方法である (田中, 2011) とされている。しかし、句動詞は、結合パターンが複数あることや、多義性などの様々な要因から、学習者にとって習得が困難であり、学習者は句動詞の使用を回避する傾向があることが指摘されている (Dagut & Laufer, 1985; Liao & Fukuya, 2004)。また、森本 (2009) では、意味的明瞭性の低いものほど句動詞の習得は困難であり、海外在住経験の有無に関わらず、句動詞の習得は困難であることが示されている。しかし、ここで議論されている句動詞は、[動詞+副詞]の二語からなるものであり、三語句動詞に関する議論は句動詞習得研究において未開拓の領域である。本研究では、二語の句動詞の習得において十分に明らかにされてこなかった句動詞の品詞による習得度や習得に困難を与えている学習者変数なども含めて調査研究を行う。

## 3 三語句動詞習得調査

### 3.1 本研究の研究課題

本研究は、日本人成人英語学習者による三語句動

詞習得状況を、前置詞、副詞、動詞に分けて調査した。調査に際し、以下の研究課題を設定した。

- (1) 学習者は、三語句動詞をどのように学習しており、学習方法が習得に影響を与えているか。また、習得率に影響を与えている学習者変数は何か。
- (2) 三語句動詞において、学習者が学習の際に困難を要する部分 (動詞、副詞、前置詞) は何か。
- (3) 意味の透明性 (transparency) と学習経験度 (familiarity) は習得率に影響を与えているか。
- (4) 海外在住経験の有無で習得率に差があるか。
- (5) 英語レベルによって習得率に差はあるか。

まず、(1) に関して、学習方法や学習者の性質 (性別、学年、英語の得意度など) が、本調査紙における句動詞の習得状況を問う 30 題からなる問題の総合得点を有意に予測するかを調べるためのものである。イディオムスコア (句動詞に関する問題の総合得点) に影響を与えている学習者変数を調査することにより、イディオムスコアの点数差の要因や学習方略の問題点を議論に加えることができる。

(2) に関しては、三語句動詞の習得研究において用いられている語の大半は中学生レベルで習うはずの基本語であるが、前項で述べたように、学習者にとって句動詞の習得は容易ではない。三語句動詞習得の困難な要因として、それぞれの基本語の意味的拡張 (比喩的な拡張や抽象化) が考えられる。三語句動詞は、基本語全ての品詞をカバーしており、品詞ごと (動詞、副詞、前置詞) のどの部分に学習上の困難点があるか調査を行うことで、特に習得に困難を要する動詞、副詞、前置詞をそれぞれ抽出し、これを克服するための学習方略・エクササイズ論に議論を展開することが可能となる。

(3) に関しては、本調査における質問紙の作成基準にもなっている。句動詞学習の難しさは、日本語訳を組み合わせただけでは理解できない点にあり、訳語中心の英語教育を受けている学習者に

としては習得されづらいことが予想される。また、三語句動詞から日本語への「連想のされやすさ」は訳語という変数だけでなく、その句動詞のプロトタイプ度と比例関係にある (Kellerman, 1979; 森本, 2009)。さらに、質問紙において出題されている句動詞の「学習経験」が習得にどのような影響を与えているのかを変数に加えた。つまり、「連想されにくい」ものであっても、学習経験が高ければ正答率が高くなるのか、それとも、学習経験が高くても、習得されにくいものはあるのかといった、経験率という変数が習得率にどのような影響を与えているのかを調査する。

(4)の海外在住経験の有無は、句動詞の学習環境に関わる部分である。海外在住経験の有無によって三語句動詞の習得に有意差が出るかどうかを調査する。

最後に、(5)であるが、TOEICやTOEFL、英検などで測られた英語レベルがイディオムスコアに影響を与えているかを調査する項目である。英語レベルが高ければイディオムスコアが高くなることは予想できるが、英語レベルの高い者であっても習得に困難を要する学習項目などがあるかといったミクロレベルの分析も行う。

これらの研究課題をもとに、以下、予備調査から本調査までの調査概要および、結果を報告する。

### 3.2 予備調査の概要

本調査における調査紙作成のため、以下のような質問紙を作成し、予備調査を行った。慶應義塾大学の二つのクラス（「言語コミュニケーション」と「研究会A(英語教育)」）の学生54名に実施した。尺度としては、「訳語との対応度がどの程度か」(transparency, (a))、問われている句動詞に関して、「知っているかどうか」(familiarity, (b))で行った。出題した三語句動詞は、頻出の表現を50項目選び、出題した。

《調査票例》He never gives up on his students.

【give up on ~の日本語訳：~を見捨てる】

(a) 訳語からの連想：

(かなり連想しにくい) (とても連想しやすい)

1——2——3——4——5——6

(b) 下線部の句動詞に関して：

(A) 見たことがある・(B) 見たことがない

この予備調査(a), (b)の結果を合わせ、「I 連想しやすく見たことがある、II 連想しにくく見たことがない、III 連想しにくいともしやすいとも言えず、見たことがある」の三者に解答が集中したため、この3分類に該当する句動詞をそれぞれ10題ずつ、本調査において出題することにした。

### 3.3 本調査の実施と結果考察

#### 3.3.1 本調査の実施概要

##### (1) インフォーマント

本調査は慶應義塾大学環境情報学部の「言語コミュニケーション」「ソシオセマンティクス」の講義において実施された。本調査への参加者は大学1年から4年生の計306名であった。そのうち、設問解答の有効回答者数は304名であった。

##### (2) インフォーマント(被験者)特性

インフォーマントの具体的な内訳としては、1年生が123名(40.59%)、2年生が70名(23.10%)、3年生が74名(24.42%)、4年生が36名(11.88%)であった。また、所属学部については、総合政策学部が142名(47.18%)、環境情報学部が159名(52.82%)、無回答3名であった。性別に関しては、男性が192名(63.16%)、女性が112名(36.84%)であった。

また、海外在住経験の有無に関しては、有と答えた者が65名(21.38%)、無と答えた者が239名(78.62%)であった。海外在住期間に関しては、1年未満が最も多く、25名(38.46%)であり、次いで2年～4年11ヶ月が23名(35.38%)、5年～9年

11ヶ月が10名(15.38%)、1年～1年11ヶ月が4名(6.15%)、10年以上が3名(4.62%)となっている。

### (3) 質問紙の構成

質問紙は Part1 から Part3 の三部構成になっている。Part1 はインフォーマントの基礎データ(学年、学部、性別、年齢、英語に関するテストスコア、海外在住経験の有無、英語の得意度、イディオム学習の得意度)を問うている。メインの習得調査は、Part2 で行われ、質問項目がそれぞれ30題で A,B,C の3パターンあり、選択部分が違うものをそれぞれ異なった被験者に問うものとなっている。Part3 は三語句動詞の学習方略や学習者の認識に関する質問から構成されている。以下は Part2 の質問紙の一部抜粋である。

以下のように、状況を日本語で提示し、前置詞(質問紙 A)、副詞(質問紙 B)、基本動詞(質問紙 C)の3種類同じ設問で、選択させる部分が違うものを3種類用意し、異なったインフォーマントにそれぞれ調査を行った。

《状況》:

他人を軽蔑することを決してしない友人にふれる場面で。

(質問紙 A)

He never looks down (1. to 2. for 3. with 4. on) others.

(質問紙 B)

He never looks (1. down 2. out 3. away 4. back) on others.

(質問紙 C)

He never (1. comes 2. goes 3. looks 4. turns) down on others.

### (4) テスト特性

本研究で用いられた調査紙の特性として、以下の二点が挙げられる。

- (a) 同じ質問項目が30題記載された調査紙を3パターン用意し、前置詞、副詞、動詞(それぞれ調査紙 A, B, C とした)の選択に関する問題を作成した。
- (b) 調査項目選択の際、transparency(日本語の訳語からの連想のしやすさ)と familiarity(句動詞の学習経験度)の2者を変数とし、学習者に予備調査を行った結果、以下の3分類が作成され、本調査において各10題(計30題)の調査項目を設定した。

- 【Ⅰ】連想しやすく見たことがある。
- 【Ⅱ】連想しにくく見たことがない。
- 【Ⅲ】連想しやすいともしにくいとも言えず、見たことがある。

### 3.3.2 三語句動詞習得調査結果

#### 3.3.2.1 基礎データと正答率の相関関係

英語の得意度、イディオム学習の得意度、学年、学習法として「英単語集で繰り返し暗記した」<sup>1</sup>、というそれぞれの項目が、今回の調査紙における30題からなるイディオム得点(Idiom Score)を有意に予測するかどうかを検討するために、イディオム得点の結果を予測変数とし、英語の得意度、イディオム学習の得意度、学年、学習法として「英単語集で繰り返し暗記した」項目それぞれを説明変数として重回帰分析を行った( $R^2=0.241$ )。その結果、表1で示すように、英語の得意度( $\beta =0.305, p<0.001$ )もイディオムの得意度( $\beta =0.173, p<0.01$ )も「英単語集で繰り返し暗記した」学習方略( $\beta =0.111, p<0.05$ )も学年( $\beta =-0.132, p=0.05$ )もそれぞれ、有意な予測変数となった。 $\beta$ の値は、英語の得意度の方がイディオムの得意度や「英単語で繰り返し暗記した」学習方略よりも大きく、0.1パーセントレベルで有意であるため、英語の得意度がイディオム得点を一番強く予測していることが分かる。また、学年は $\beta$ の値がマイナスになっており、0.5パーセントレベルで有意であるため、学年が上がるにつれて、

表1 Idiom Scoreを予測する重回帰分析結果

変数名	満点	平均	標準偏差	$\beta$	t値	
予測変数 (従属変数)						
Idiom Score	30	15.42	4.42			
説明変数 (独立変数)						
英語の得意度	5	2.83	1.1	0.305	4.79	***
イディオムの得意度	5	2.62	1.075	0.173	2.725	*
学習方略 (丸暗記)	1	0.71	0.454	0.111	2.15	**
学年	6	2.07	1.065	-0.132	-2.553	**

注1:  $n=304$ . \* $p<.01$  \*\* $p<.05$ . \*\*\* $p<.001$ .

注2: 決定係数 ( $R^2$ ) は、.241であった。

成績が下がっていくことを有意に予測していることが分かる。

このように、句動詞を「丸暗記」をしたことによって成績に影響が出ていることと、学年によって成績が下がるという結果は関連性があると考えられる。つまり、受験英語などで「暗記した」句動詞は、忘れやすいため、学年が上がるに従って成績が下がったことが推測される。

### 3.3.2.2 前置詞 (A)、副詞 (B)、動詞 (C) における質問紙間の比較

同内容の質問紙を選択部分に応じて、A(前置詞選択)、B(副詞選択)、C(動詞選択)それぞれに関して、三種類の質問紙を用意し、質問紙間での有意な差が見られるかを調べるために、一元配置の分散分析および、多重比較を行った。結果は以下の表2の通りである。なお、インフォーマント(被験者)は、大学生(学部生)の同一授業の学生を対象とし、等質であることを仮定している。一元配置の分散分析により、 $F(2,301)=4.237, p<.05$ となることが分かり、質問紙間の平均値差に有意な差があることがわかった。具体的にどの水準間に有意差があるかを調べるために、多重比較 (multiple comparisons) を行った。シェフェの多重比較により、A,B間、B,C間には有意な差が見られ、A,C間は同質であることがわかる。なお、Student-Newman-Keuls法による多重比較を行うと、AとCが同質で、Bとは有意に異なるという結果が見られた。つまり、難易度では、B(副詞の選択)が易しく、A(前置詞)とC(動詞)がBと比べて難しいことが分かった。

表2 前置詞、副詞、動詞選択における質問紙間の比較

グループ	被験者数	平均	標準偏差
A 前置詞選択	119	14.79	4.061
B 副詞選択	95	16.48	4.363
C 動詞選択	90	15.13	4.772
分散分析の結果	$F(2,301)=4.237, p<.05$		
シェフェの多重比較の結果	A<C<B		
SNKの多重比較	A=C<B		

【注】設問無回答者1名のため、全体人数305名より1名少ない結果となっている。

### 3.3.2.3 分類における正答率の比較

本調査紙は予備調査の結果、以下の三分類、各10問ずつで出題した。調査紙における質問項目は同じで、A(前置詞選択)、B(副詞選択)、C(動詞選択)の3種類用意した。質問紙の分類としては、前述したように、「I 連想しやすく見たことがある、II 連想しにくく見たことがない、III 連想しにくいともしやすいとも言えず、見たことがある」である。この分類I~IIIによる正答率の比較を行ったところ、以下の表3のようになった。難易度としては、どの質問紙間も同じ傾向が見られ、IIの「連想しにくく見たことがない」が最も難しく、Iの「連想しやすく見たことがある」は最も易しかった。

各質問紙間で、分類による有意差があるかどうかを調べるために、一変量のT検定を行ったところ、以下の表4のように有意差が見られ、分類によって難易度に差があったことがわかる。

これらの結果により、「連想のしやすさ (transparency)」と「経験度 (familiarity)」が習得率に有意に影響を与えていることがわかった。

表3 分類によるスコア平均値の比較

質問紙	分類	平均(10点満点)	難易度
A	I	6.03	
A	II	3.70	II<III<I
A	III	5.06	
B	I	7.13	
B	II	3.64	II<III<I
B	III	5.72	
C	I	7.28	
C	II	2.48	II<III<I
C	III	5.79	

表4 分類による正当率の有意差分析結果

質問紙	F 値	有意確率
A	$F(2,52.368)$	$p<.001$
B	$F(2,89.284)$	$p<.001$
C	$F(2,127.977)$	$p<.001$

## 3.3.2.4 海外経験の有無による比較

## 3.3.2.4.1 海外経験の有無による正答率の比較

海外在住経験の有無による全体の正答率の比較した平均、標準偏差、有意確率に関しては、以下の表5のようになる。海外在住経験の有無による有意差は、質問紙 A, B, C ともに無く、海外経験の有無が正答率に影響を与えていないことがわかる。

表5 海外在住経験の有無による Idiom Score の比較

質問紙	海外経験	平均	標準偏差	n	有意確率
A	有	17.24	3.688	25	有意差なし
A	無	14.14	3.953	94	
B	有	16.90	3.919	20	有意差なし
B	無	16.37	4.493	75	
C	有	15.75	4.241	20	有意差なし
C	無	14.96	4.927	70	
全体		15.89	4.204	304	

表7 英語レベルの設定基準

レベル	TOEIC	TOEFL(PBT)	TOEFL(CBT)	TOEFL(iBT)	IELTS	英検
レベルⅠ(上)	730 以上	550 以上	213 以上	81 以上	6 以上	1 級~準1 級
レベルⅡ(中)	475 以上	460 以上	140 以上	48 以上	4.5 以上	2 級
レベルⅢ(下)	475 以下	460 以下	140 以下	48 以下	4.5 以下	3 級以下

## 3.3.2.4.2 海外経験長期滞在者と短期滞在者の比較

海外在住経験5年以上を長期滞在者として分類し、追加調査において、5名を新たに加え、19名の英語圏の海外長期滞在経験者と短期経験者52名における得点の正答率の有意差を見る為に、質問紙(A, B, C)ごとに、一元配置の分散分析を行ったところ、以下の表6のような結果になった。

表6 海外長期滞在経験者と海外短期滞在者の正答率の比較

質問紙	海外経験	n	平均(点)	有意差
A	長期経験	6	22.17	$p<.001$
A	短期経験	22	16.36	
B	長期経験	6	17.17	有意差なし
B	短期経験	16	17.31	
C	長期経験	7	17.14	有意差なし
C	短期経験	14	15.64	

質問紙A(前置詞選択)においてのみ、海外長期経験のあった者の正答率が有意に高かったが( $p<.001$ )、質問紙B(副詞)と質問紙C(動詞)に関しては海外長期・海外短期間での有意差が見られなかった。このように、海外経験によって句動詞の習得が促されるとは言えないことが推測される。

## 3.3.2.5 英語力による比較

## 3.3.2.5.1 被験者の英語力

被験者の英語力を英検の取得級、TOEIC、TOEFL、IELTSなどの得点などを参考に、以下の表7のように設定した。被験者のレベルは、レベルⅠ(上級)・レベルⅡ(中級)・レベルⅢ(下級)に分類した(なお、分類に関しては神戸市外国語大学が公表している換算表を参照した。換算表は、神戸市外国語大学の[http://www.kobe-cufs.ac.jp/about/contribution/license/files/toEIC\\_toEFL\\_score.pdf](http://www.kobe-cufs.ac.jp/about/contribution/license/files/toEIC_toEFL_score.pdf)を参

照)。人数の内訳としては、質問紙 A ではレベル I が 12 名、レベル II が 20 名、レベル III が 55 名、質問紙 B では、レベル I が 15 名、レベル II が 23 名、レベル III が 42 名、質問紙 C では、レベル I が 12 名、レベル II が 11 名、レベル III が 51 名であり、全体では、レベル I が 39 名、レベル II が 54 名、レベル III が 148 名であった。なお、無回答もしくは、不明とした人は以下の分析には含まれない。

3.3.2.5.2 英語力によるイディオムスコアの分析

英語力によってイディオムスコアに有意差が出るかについて、一元配置の分散分析および、多重比較を行った。表 8 で示すように、質問紙全体ではレベルによって、有意な差が見られた ( $p < .001$ )。多重比較の結果、レベルの上級・中級 (レベル I・II) 間では有意な差は見られなかったが、レベルの上級・中級それぞれとレベルの下級 (レベル III) との間には有意差が見られた。質問紙 A (前置詞選択) にお

いては、上級・中級 (レベル I・II) 間では有意な差は見られなかったが、多重比較の結果、レベルの上級・中級それぞれとレベルの下級 (レベル III) との間には有意差が見られた。質問紙 B (副詞選択) および、質問紙 C (動詞選択) においては、質問紙間の有意差は見られなかった。

このように、三語句動詞の学習においては、レベルの上下において習得率に差はあるものの、上位レベルと中位レベルの間には大きな差は見られず、英語力がある者が必ずしも句動詞を十分に習得しているとは言えないことが推測される。

3.3.2.6 質問紙間での有意差分析結果

質問紙間での正答率の有意差を見るために、独立性の検定を行った結果を以下で考察を行う。なお、経験度と連想度は予備調査において行った結果を示している。

表 8 英語力による有意差分析結果と平均値・多重比較結果

質問紙	英語力	平均 (30 点未満)	平均の高低	多重比較			
A	レベル I	17.58		I と II の間には有意差なし			
A	レベル II	17.10	III < II < I	I と III の間は $p < .05$ で有意			
A	レベル III	14.36		II と III の間は $p < .05$ で有意			
B	レベル I	18.20					
B	レベル II	17.74	III < II < I	全て有意差なし			
B	レベル III	16.00					
C	レベル I	17.83					
C	レベル II	15.82	III < II < I	全て有意差なし			
C	レベル III	15.08					
質問紙	F 値	有意確率	全体	レベル I	17.90		I と II の間には有意差なし
A	$F(2,6.423)$	$p < .01$	全体	レベル II	17.11	III < II < I	I と III の間は $p < .001$ で有意
B	$F(2,2.344)$	有意差なし	全体	レベル III	15.07		II と III の間は $p < .05$ で有意
C	$F(2,1.676)$	有意差なし	全体	レベル III	15.07		
全体	$F(2,10.425)$	$p < .001$	全体	レベル III	15.07		

表 9 前置詞・副詞・動詞選択全てで正答率の高いもののリスト

質問	質問文	問題文の訳語	経験率	連想度	動詞正答率	副詞正答率	前置詞正答率
4	I just want to <u>get away from</u> the city life.	～から抜け出し	98.15%	5.35	74.16%	77.66%	82.20%
7	He has <u>got to stand up for</u> right.	～のために立ち上がる	85.19%	4.93	75.28%	81.91%	70.59%
11	We must <u>make up for</u> lost time.	～の埋め合わせをし	94.44%	4.31	67.42%	77.66%	65.55%
15	She <u>caught up with</u> her friend.	～に追いついた	96.30%	4.63	85.23%	84.21%	88.14%
16	I can't <u>come up with</u> any more ideas.	思いつか (ない)	94.44%	3.85	73.86%	72.63%	67.80%
18	I <u>ran out of</u> butter.	～を使い切ってしまった	87.04%	4.87	81.82%	85.26%	86.44%

3.3.2.6.1 質問紙間での有意差が見られないもの

質問紙間での正答率に有意差が見られず、前置詞・副詞・動詞選択全てで正答率の高かったものに関して、表9で示す以上の6題があった。

以上の表9は、予備調査で行った経験度率、連想度の平均(6点満点)が記載されており、どれも経験度が高く、比較的、連想度も高いものが多いことがわかる。正答率の高いものの傾向として、(1) 連想度が高く(字義的解釈が可能)であり、経験率が高いもの(get away from、stand up for)、(2) 連想度は高くないが、経験率が高いもの(make up for、

catch up with、come up with、run out of)の二点がある。

次に、前置詞・副詞・動詞の選択において、正答率に有意差が見られず、正答率が低かったものに関して、以下の表10に示す3題があった。

これらは、予備調査の学習経験率の調査でも認知度が低く、訳語からの連想度も低かった。この結果から、学習者が与えられた状況を、句動詞を用いて柔軟に表現することに困難があると言える。

表10 前置詞・副詞・動詞選択全てで正答率の低いもの

質問	質問文	問題文の訳語	経験率	連想度	動詞正答率	副詞正答率	前置詞正答率
8	I don't go in for fancy living.	~を好ま(ない)	48.15%	2.06	22.47%	25.00%	26.89%
9	We've put in for a grant to repair the building.	~を申請する	31.48%	2.48	26.97%	25.53%	16.81%
21	I went back on a promise to my parents and quit school.	~を裏切って	40.74%	2.57	20.45%	24.47%	33.90%

表11 前置詞選択での正答率の低いもの一覧

質問	質問文	問題文の訳語	正当率	経験率	連想度
1	He never gives up <b>on</b> his students.	見捨て	17.09%	66.67%	3.81
3	He never looks down <b>on</b> others.	軽蔑する	49.15%	90.74%	5.04
6	He is looked up <b>to</b> as a great writer.	尊敬されて	42.86%	96.30%	4.81
13	We look back <b>on</b> those years as the best in our life.	振り返ってみる	36.97%	87.04%	4.87
19	I'm going to drop in <b>on</b> him tomorrow.	に立ち寄る	22.88%	74.07%	3.22
22	Every summer I break out <b>in</b> a rash.	湿疹ができる	18.64%	37.04%	2.81
23	This doesn't stand up <b>to</b> the other firm's product.	~に対抗	20.34%	61.11%	4.02
26	Australia did away <b>with</b> the death penalty.	を廃止した	28.57%	75.93%	3.54
29	A lady came in <b>for</b> a consultation.	しに来た	37.82%	53.70%	3.69

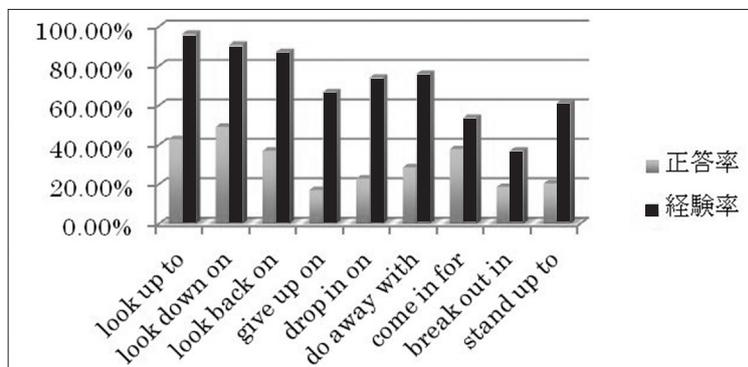


図1 前置詞選択で正答率の低いものの正答率と経験率の比較

表 12 動詞選択で正答率の低いもの一覧

質問	質問文	問題文の訳語	正当率	経験率	連想度
5	We have to <b>keep</b> up with the changes in technology.	遅れずについてゆく	67.42%	92.59%	4.65
10	He didn't have enough time to <b>come</b> up with the material itself.	を用意する	25.84%	68.52%	3.06
12	I cannot <b>put</b> up with your behavior any longer.	耐え	38.20%	90.74%	3.13
14	I have some savings to <b>fall</b> back on.	当てにできる	22.99%	42.59%	2.93
20	The man <b>made</b> away with my bag.	を持ち去った	7.95%	27.78%	2.56
24	He isn't <b>cut</b> out for teaching.	には向いて	18.18%	40.74%	2.06
25	She <b>came</b> down with flu.	にかかってしまった	23.86%	70.37%	3.02
28	He cannot <b>come</b> up for re-election next time.	立候補	28.41%	44.44%	2.89

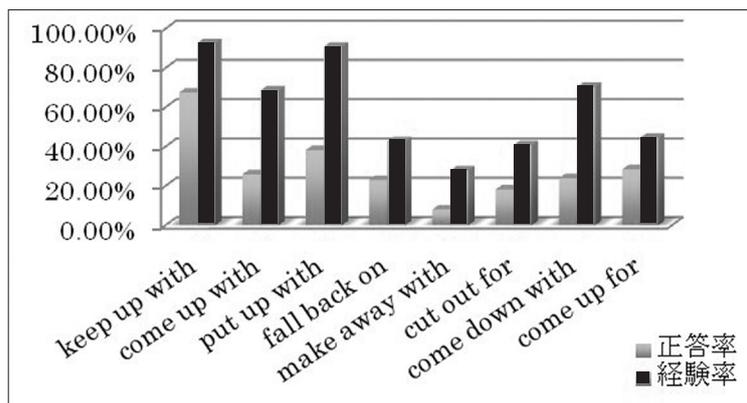


図 2 動詞選択で正答率の低いものの正答率と経験率の比較

### 3.3.2.6.2 質問紙間で有意差があるもの

質問紙間での正答率に有意差が見られたものとして、前置詞選択と動詞選択があった。まず、前置詞選択において、有意に正答率の低かったものに関して、表 11 および図 1 で示す

表や図から読み取れるように、予備調査結果から学習経験の高い句動詞が大半を占めるが、正答率を見ると、どれも五割を下回っており、学習者にとっては習得が困難であった学習項目である。

次に、動詞の選択において、正答率が有意に低かったものは以下の表 12・図 2 の通りである。

表・図で示すように、動詞選択に関しても、前置詞選択と同様の傾向が見られ、経験率は高いにも関わらず、習得が困難であったものが多いことがわかる。特に、設問 12 の put up with ~は、90.74%の経験率があるにも関わらず、動詞 put の正答率は 38.20%であり、習得率が低い結果となっている。

## 4 本研究の要約

本研究では、英語における三語句動詞の習得調査の結果と考察をもとに、その要因の分析を行ってきた。本研究で明らかになったこととして、以下の六点を挙げる。

- (1) 「丸暗記」を中心とした学習方略は、句動詞の習得を促していない。
- (2) 前置詞と動詞に関しては、学習者にとって習得が困難であるため、意識的な学習・指導が不可欠である。
- (3) 日本語訳との対応度（連想度）が習得に大きな影響を与えている。
- (4) 経験度が高い三語句動詞であっても、間違えやすい学習項目（特に、動詞と前置詞）がある。
- (5) 英語圏在住経験があっても習得が困難なものが存在する。
- (6) 英語レベル上位者でも、中位者との間に習得率に大きな差はなく、習得に困難なものがある。

表 13 to と for の選択率の比較

設問番号	日本語訳	句動詞	to の選択率	for の選択率	分類
2	～を受けている	come in for	50.43%	19.66%	未知
6	～として尊敬されている	look up to	42.86%	31.93%	既知
7	～のために立ち上がる	stand up for	11.76%	70.59%	既知
8	～を好む	go in for	20.17%	26.89%	未知
9	～を申請する	put in for	41.18%	16.81%	未知
17	～に負ける	give in to	41.53%	20.34%	未知
23	～に対抗する	stand up to	20.34%	34.75%	既知
24	～には向いて	cut out for	12.71%	47.46%	未知
28	立候補	come up for	31.09%	38.66%	未知
29	しに来た	come in for	31.93%	37.82%	既知
30	～の面倒を見る	look out for	3.36%	63.87%	既知

まず、(1) に関しては、三語句動詞の習得に影響を与える学習者変数として「丸暗記」が大きな要因であった。これまでの暗記中心の句動詞の学習は、学習者が英語の基本語に関する本質的な理解に至っていないことがこの結果から導き出すことができる。

(2) に関しては、質問紙を3つ作成し、特に動詞と前置詞選択に関して有意に習得が困難な点があることがわかった。要因としては、動詞と前置詞に関しては、(a) 意味的拡張度（抽象化の度合い）が高いこと、(b) 日本語との訳語対応では類義表現を差異化できないこと、(c) 学習者プロトタイプが存在すること、などが挙げられる。(b) に関して、表13に示すように、for と to は、日本語訳では、「～に」で示されることの多い類義表現の例の1つだが、両者を差異化することが学習者にとって困難であることがわかった。また、(c) に関しては、「～を廃止する」というときに、do away with ～の with の部分を from にする学習者がほぼ半数 (52.37%、with と正答した者は 28.57%)、「～を持ち去る」というときに、make away with ～の with の部分を from にした者もほぼ半数 (42.37%、with と正答した者は 44.07%) であった。ここから、学習者のなかに away を見たときに、すぐに from を連想してしまう「学習者プロトタイプ」が存在することや、語のイメージから連想した結果、from を選択してしまった（実際はそれと対照的な with が正答である）という要因が想定される。

(3) に関しては、日本語から直訳できるものに関

しては正答率が高かったが、訳語対応の組み合わせでは事態を構成しづらい句動詞の正答率が低かった。つまり、三語句動詞のような英語表現において、全体の意味が部分の意味の総和になっていないという非透明性が原因と考えられる。

(4) に関しては、学習経験がある句動詞のなかでも習得に困難なものが見られ、(1) と関連するが、基本語の本質的な理解に至っていないことが句動詞の産出に大きな影響を与えていることがわかる。特に、前置詞と動詞に関しては、抽象度が高く意味的拡張がなされることが多いため、明示的な指導が必要である。

(5) に関して、例えば、do away with ～の do の選択に関して、全体的に正答率が 32.22% と低い結果となった項目だが、英語圏在住経験 5 年以上の者でも、14.29% という低い正答率となった。こうした結果から、長期間に亘り、英語圏で生活した学習者にとっても、三語句動詞の習得においては困難なものが存在することがわかり、単に英語に触れただけでは、その習得は促されることが推測される。

(6) に関して、英語力が高いとされる者であっても三語句動詞の習得に困難な点が見られた。

## 5 今後の課題

今回、検討した「海外在住経験の有無」に関して、英語圏と限定したものの、本研究では、個々が在住していた国、何歳から何歳まで在住していたか、修学していた学校の種類、一日の中での英語使用の時間など、海外経験が影響を与える様々な可能性を考

慮に入れて解明していない。このため、海外在住経験の有無が習得に影響を与えていないと結論を出すためには、今後の研究において、様々な変数を考慮に入れたうえでの検討が必要である。さらに、英語レベルと習得状況の関係については、基準として参考にした各種テストでは英語能力のどの側面をどのように評価しているかをふまえて検証しなければならない。また、レベルの上中下という三段階設定であったが、上の上と中の上を比較したらどのような結果が得られるか等、レベル間の検討を仔細に行った上で検証していく必要がある。

本研究では、三語句動詞の習得は日本人英語学習者にとっては難しく、単に訳語を介在させる英語学習の限界が明らかになった。これを踏まえ、なるべく訳語を用いずに、「文脈に依存しない」意味である語の「コア」(田中 1987, 2003 他)を利用した学習が必要である。言葉による説明は、どうしても訳語依存になってしまうため、なるべく、以下の図のようなコア図式などを利用して、視覚的に理解させ

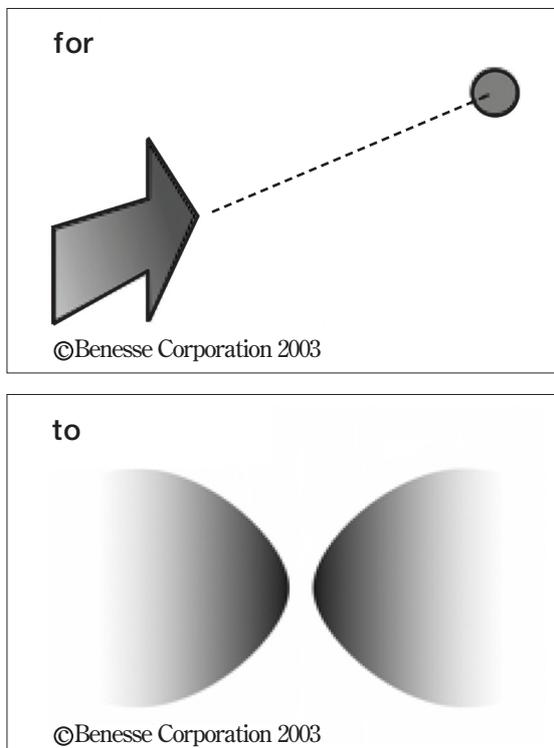


図3 for と to のコア図式

ることが重要である。例えば、for と to の違いを、コア図式(コアの記述は、『E-gate 英和辞典』(2003)に依拠する)を用いると以下の図3ようになる。

for は〈何かに向かって〉、to は〈何かに向き合っ〉をコアとする。誤答の多かった look up to ~ が for にならないのは、「尊敬する」という行為は尊敬する対象に常に〈向き合っ〉いる状態であるからと説明できる。

本研究で明らかにされた学習上困難を要する項目を教授者が踏まえ、三語句動詞の意味と表現の関係を英語感覚的に学ぶために、コアを利用して、どのような指導の工夫が必要で、どのようなエクササイズが考えられるかを今後の研究で明らかにしていく必要がある。

#### 注

- 1 他には、「規則性を発見して学習」(19.41%)、「会話のなかで学習」(13.16%)「単語の訳語を組み合わせで覚えた」(12.50%)、「洋書、洋楽、洋画などで自然に身につけた」(11.51%)「留学中や海外在住中に自然に身につけた」(9.56%)などがあったが、特に回答が集中した「英単語集で繰り返し暗記した」(71.05%)に絞った。

#### 参考文献

- 田中 茂範『英語のパワー基本語 [基本動詞編]』、コスモビア、2011年。
- 田中 茂範『基本動詞の意味論—コアとプロトタイプ—』三友社出版、1987年。
- 田中 茂範・佐藤 芳明・阿部 一『英語感覚が身につく実践的指導』大修館書店、2006年。
- 田中 茂範・武田 修一・川出 才紀(編著)『Eゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション、2003年。
- 森本 俊『認知意味論的アプローチに基づいた英語句動詞の研究—意味論・習得論・エクササイズ論—』博士論文、慶應義塾大学 政策メディア研究科、2009年。
- Bolinger, D., *The phrasal verb in English*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1971.
- Dagut, M. B. & Laufer, B., "Avoidance of phrasal verbs by English learners, speakers, of Hebrew: A case for contrastive analysis", *Studies in Second Language Acquisition*, 7, 1985, pp.73-79.
- Fraser, B., *The verb-Particle Combination in English*. The Hague: Mouton, 1976.
- Hulstijn, J. H., & Marchena, E., "Avoidance: Grammatical or semantic causes?" *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 1989, pp.141-155.
- Kellerman, E., "Transfer and non-transfer: Where we are now." *Studies in Second Language Acquisition*, 2, 1979,

pp.37-57.

Liao, Y. & Fukuya, Y. J., "Avoidance of phrasal verbs:  
The cause of Chinese learners of English", *Language  
Learning*, 54(2), 2004, pp.193-226.

[受付日 2013. 2. 28]

[採録日 2013. 6. 26]